

2005年(H17年)オホーツク海沿岸におけるサンマ漁況の見通し

2005年9月28日

北海道立釧路水産試験場・網走水産試験場・稚内水産試験場
独立行政法人水産総合研究センター東北水産研究所・北海道水産研究所

【漁況見通し】

来遊資源量：来遊は少ない
魚体組成：来遊しても小型魚が主体
来遊時期：北海道沿岸域への来遊は10月後半

魚体説明：特大魚（体長32cm以上）、大型魚（29-31cm台）、中型魚（24-28cm台）
小型魚（20-23cm台）、ジャミ（20cm未満）

1. 昨年(2004年)の漁況

2004年のオホーツク海におけるサンマの漁獲量は719トンであった。ほとんど漁獲のなかった前年より増加したものの、1990年以降でみると低水準であった。

2004年のオホーツク海各港におけるサンマの水揚げは、10月19日から11月20日までの約1カ月間行われたが、10月21日から11月1日に水揚げが集中し、この12日間で2004年の総漁獲量の約96%を占めた。

2. オホーツク海へのサンマの回遊

例年オホーツク海で漁獲対象となる魚群は中型・小型魚が主体で、この群は南部千島太平洋側へ接岸したものの一部が、7月から8月にオホーツク海へ移動・回遊するものと考えられている(図1)。従って、7月から8月に太平洋海域に分布する中型・小型魚の分布量が多く、なおかつ南部千島海域の表面水温がサンマの移動・回遊に適していれば、オホーツク海への来遊資源量は多くなると考えられる。また、オホーツク海に回遊したサンマは、8月から9月頃はオホーツク海の中南部海域に広く分布するが、9月以降に海水温の低下とともに、比較的水温が高い(10℃以上)北海道沿岸域へと移動し、そこで漁場が形成される(図1)。

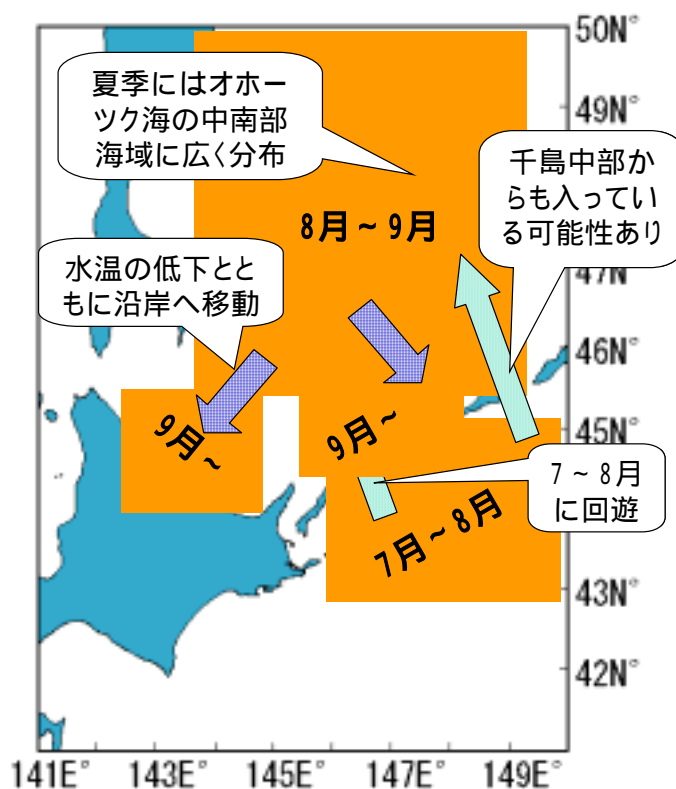


図1 オホーツク海で漁獲されるサンマの回遊想定図

3. 来遊資源量

・6月から8月の太平洋における中型・小型魚の分布量

2005年7~8月の太平洋海域(主に東経150度以西)における漁獲物は大型魚が主体で、中型・小型魚の漁獲尾数は0.20億尾と推定され、昨年(0.64億尾)より減少した(図2)。

東北区水産研究所が今年の漁期前(6月から7月)に実施した中層トロール調査結果から、東経162度以西の太平洋海域における中型・小型魚の分布尾数は17億尾と推定され、これは昨年(154億尾)および一昨年(53億尾)を大幅に下回った。

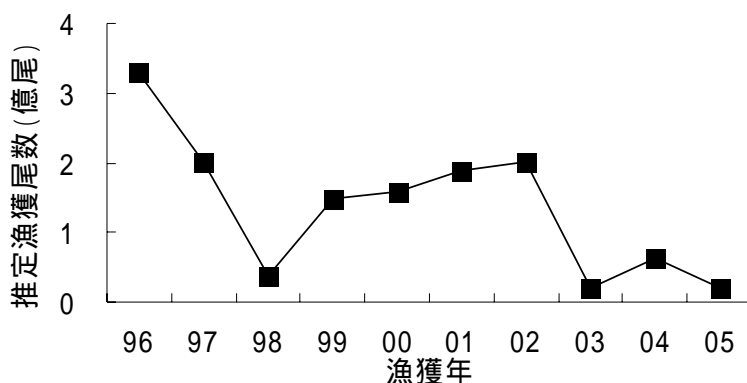


図2 太平洋海域における中型・小型サンマの推定漁獲尾数(8月下旬まで)

・オホーツク海へ回遊する海況条件

7月から8月の南千島海域における表面水温が高い年には、サンマがオホーツク海へ回遊する条件が良好であると考えられている。今年の7月中旬から8月下旬の南千島海域(図3で示した海域)は、サンマの回遊に適すると考えられる水温10以上の水に広く覆われていた(図4)。従って、今年の太平洋からオホーツク海へ回遊する海況条件は良好であったと考えられる。

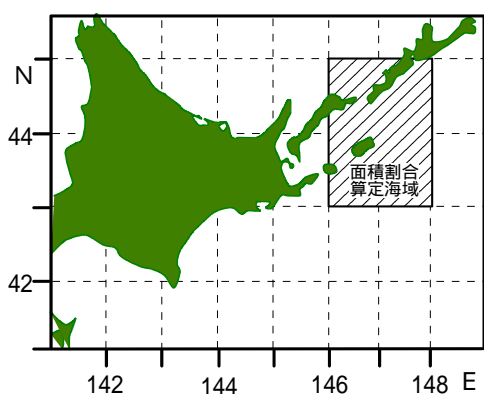


図3 表面水温10以上が占める割合を算定した海域

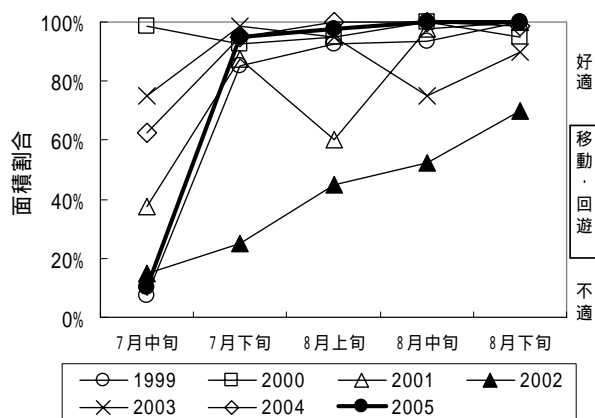


図4 南千島海域における表面水温10以上が占める面積割合

・オホーツク海における魚群探索・目視調査結果

9月12日から15日にオホーツク海域で稚内水産試験場試験調査船北洋丸によるオホーツク海サンマ漁期前調査を実施した。海洋観測点での表面水温は12.7~18.4。強い潮境もなく、この時期のサンマの分布に適した15前後の水温域が広がっていた。

夜間、航行しながらの探照灯による魚群探索調査では、サンマのハネは、ほとんど見られなかった(図5)。また、停船して目視した観測点22点のうち十数尾以上のサンマの群れが認められたのはわずか3点で、残る19点ではサンマは皆無あるいは数尾しか見られなかった(図5)。

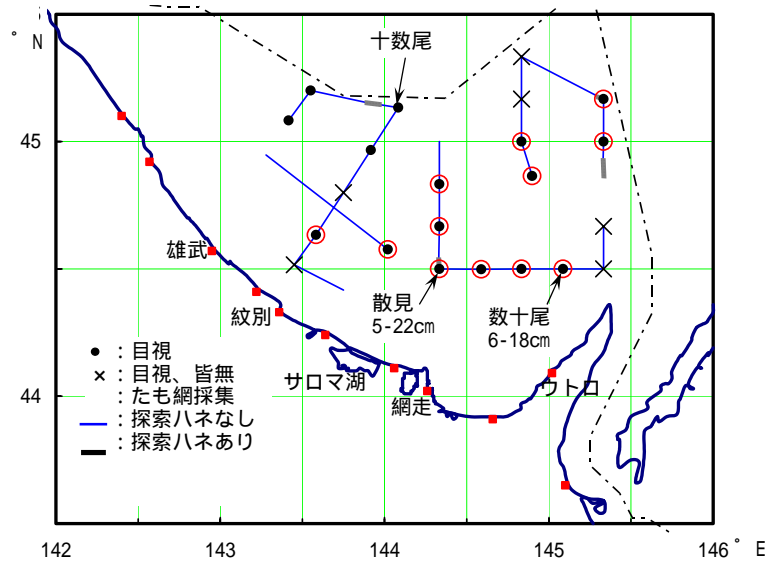


図5 サンマ魚群探索・目視調査結果 2005年9月12日~15日

4. 魚体組成

前述の漁期前調査時には流し網で採集可能なサンマは発見できず、たも網によって肉体長5~22cmのサンマが採集されたのみである(図6)。このうち、98%が20cm未満のジャミサンマで、20cm以上の小型魚は3尾採集されたのみであった。

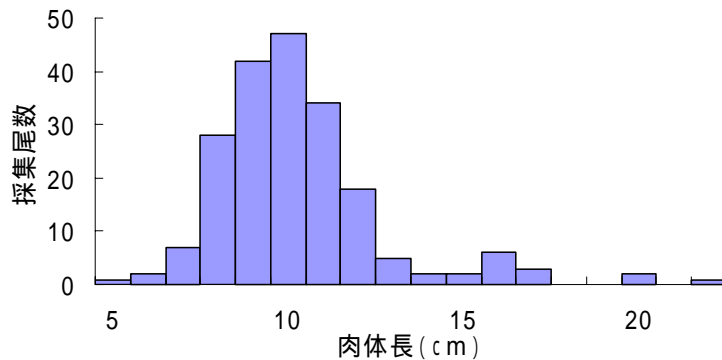


図6 北洋丸の調査時に、たも網で採集されたサンマの体長組成

5. 北海道沿岸域への来遊時期

紋別沖の週間平均表面水温の年最高値とオホーツク海におけるサンマ初漁日の間には、週間平均表面水温の年最高値が 17 以上の年に限れば、水温が高い年ほど初漁日が遅くなる傾向が見られる（図 7）。

今年 9 月中旬までの週間平均表面水温の最高値は、8 月第 3 週の 19.4 であった。これは近年の中では 2 番目に高く、最高値を示した時期も例年より遅かった。

前述の 9 月中旬に実施した漁期前調査時には、沖合までサンマの分布適水温に広く覆われていたにもかかわらず、サンマの群れはほとんど発見できず、ジャミサンマが散見された程度であった（図 5）。

以上のように、サンマの群れは 9 月中旬で沖合域にもまだ見られず、今年の年最高表面水温が高かったことから、北海道沿岸域への来遊は少なく、来遊しても 10 月後半になると考えられる。

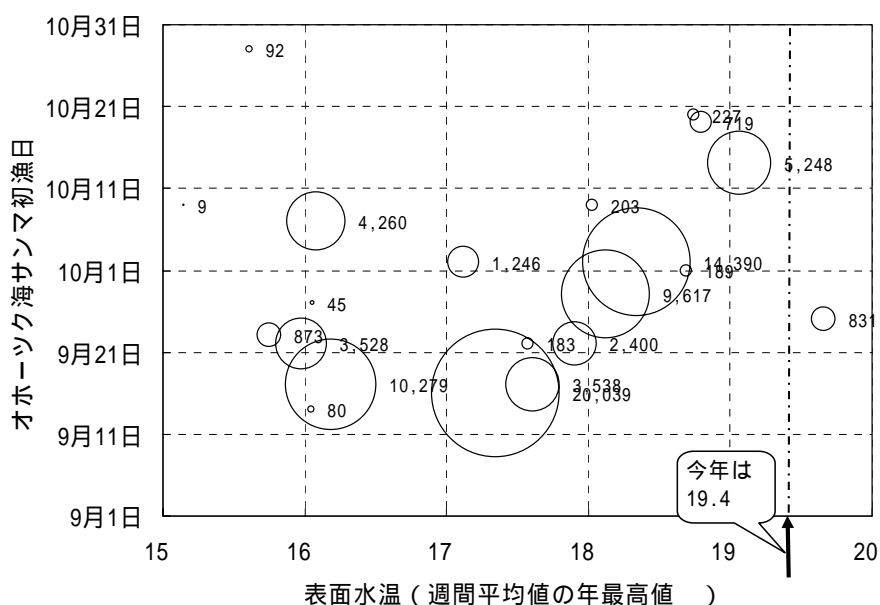


図 7 紋別沖の週間平均表面水温の年最高値とオホーツク海におけるサンマ初漁日の関係
表面水温は北緯 44 度～45 度，東経 143 度～144 度の海域。図中の数字は漁獲量（トン）を示す。

従って、今年太平洋海域に分布するサンマの中型・小型魚の資源量が昨年を大幅に下回ること、オホーツク海における漁期前調査でも漁獲対象にならないジャミサンマと、ごく少数の小型魚しか発見できなかったことから、北海道のオホーツク海沿岸へ来遊するサンマは少なく、来遊しても小型魚で、その来遊時期は遅いと考えられる。

6. その他

オホーツク海で操業する棒受網船の多くは太平洋から回航してくるため、来遊資源量が十分ならば、漁獲量はこの回航隻数と操業期間（延べ操業隻数）に左右される。また、9 月中旬・下旬の道東太平洋の漁況が良好である年はそこで操業を続けるため、オホーツク海への回航隻数は少なくなる。そのため、この時期の道東太平洋の漁況がオホーツク海の漁獲量を決定する主要因の一つになっている。今年 9 月中旬の道東太平洋海域の漁況は良好で、このまま好漁が続けば、オホーツク海へ回航する漁船は少ない可能性が高い。